

書

評

Some Concerns and Methods of the Ming Ch'uan-chi Drama

Cyril Birch

シリル・バーチ「明代傳奇に關する若干の問題と方法」

中國の演劇は、周知の通りそれが歌劇である性質上、使用する音樂の相違によって、北曲と南曲の二つの系統に大きく分かれている。またそれらは、前者が元代に、後者が明代に主に流行した爲、一般に元曲（即ち元の雜劇）、明曲

(即ち明の傳奇)とも呼ばれているが、兩者は單に音樂上の相違にとどまらず、演劇形式、使用する言語、更には、各々の演劇内容が持つ一般的傾向に至るまで、對照的な性格を示している。そして兩者を比較してみる時、勿論個々の作品による優劣は有るにせよ、全體的に言えば、この分野での草分け的存在であつた王國維が既にそうであつたように、元雜劇を、その緊密な構成、俗語をふんだんに使用した活潑な言語、そして主に庶民的な世界を描いて人間の眞に迫る素朴で力強い内容によつて、中國演劇の最高峰とみなす考え方が支配的であつた。

Cyril Birch 氏のこの論文は、そのような從來の見解に對して、明代傳奇をもう一度検討し直し、そこに新たな評價を試みようという意圖の下に書かれている。その爲に、氏は「青衫記」「鳴鳳記」「還魂記」という、各々性格の異なる三つの作品を扱われ、これらの作品を、あくまでもレールゼドラマとして讀むことを前提とされた上で、各々の内容に即して、かなり細かい検討を施された。この書評では、各々の内容についての個別的な見解に對して言及すること

は避け、そこから窺われる氏の明代傳奇に對する位置づけ方について、簡單に評者の意見を述べてみたい。

氏はこの論文の中で、主に二つの方法によつて作品を分析されている。

先ず第一は、明代に發展を遂げた小説との關連によつて戯曲を考えるやり方である。氏が傳奇形式の新しい貢獻として挙げられた三つの點、即ち、自然主義的な描寫の細かさ、多數の役柄間に於ける相互作用、そして全體的により複雑な構造、これらはみな、從來傳奇形式の缺點とされてきた冗漫さや雜駁さを、實は言い直したものに過ぎない。同じものを、描寫の細かさ、複雑な構造と見るか、或いは單なる冗漫雜駁と見るかは、この場合視點の相違による。氏は、從來缺點とされてきたものを、新たに長所へと轉化させたのであり、その爲に小説という別の視點が導入されているのである。

即ち、小説の目的は、生活を日常的な側面から描くことであり、従つて、そこでは繁雜な會話等の持つ日常性の描寫が重要な役割を果すこと、演劇が主に少數の登場人物の

葛藤を描くのに對して、小説では、より多數の人間達が織り成す世界が設定されること、そして、これら小説の特徴が、實は明代傳奇に見られるそれと一致するものであることが、實例を伴いつつ述べられている。また、傳奇に頻々見られる駄洒落や謎々の言語遊戲の性格、一つの具體的な「物」に物語全體を象徵させる手法、(例えば、「青衫記」では、白樂天の青衫をめぐって物語が展開する。)、或いは、副次的なエピソードの挿入等も、やはり小説と共通の性格であつて、このようにして形造られた傳奇の複雑な構造こそ、元雜劇の單純な構造的統一に取って代るべき新しい文學的建造物であるというのが、氏の主張の骨子である。

明代の傳奇が小説との類似性を示すという氏の指摘は認められてよいであろう。但し、その扱い方については、なお議論の餘地があるものと思う。

氏が、小説の特徴、從つてまた元雜劇に對して明代傳奇が持つ特徴、として挙げられた諸點、中でも、複雑な構造、描寫の細かさ、多數の登場人物、お喋りや駄洒落、挿話の使用等は、それらが生じた原因として、少なくとも表面的

には、傳奇が雜劇に比べて格段の長さを持つという事實に負う所が、非常に大きいと考えられる。從つて、これらの點については、果してどこまでが量的な相違で、どこからが質的な相違なのかを見定めることは難しい問題である。

また例えば、登場人物の多寡によつて、小説と戯曲を分けようとする見解は、量的な相違が、即ち質的な相違につながるという考え方を、その背景に持つであろうが、このような區分法には、アリストテレスの「詩學」に於ける悲劇と敘事詩以來の西洋の傳統的ジャンル觀が投影しているようである。興味と同時に不安を感じた。確かに、西洋に於ては、ギリシャの昔より、演劇とは、比較的短時間の中で、單一の事件を緊密な構成の下に描くべきものであつたろう。しかし、西洋の演劇がそうだからと言って、演劇というのが本質的にそういうものなのかどうかは、慎重に吟味してみる必要があるように思う。

Bridg 氏の用いられたもう一つの方法は、明代傳奇こそ、作者、或いは當時の人々の心情を最も率直に表現した文學であるという視點に立つて、論を進めるやり方である。氏

は、その爲に先ず、民國の學者吳梅が「曲海總目提要」に寄せた序文の一部を引用された上、「鳴鳳記」と「還魂記」の二つの作品が、吳梅のこの「大膽なテーゼ」を顯證するであろうと述べておられる。引用された吳梅の序は次の通りである。

余嘗て謂えらく、古今の文字は獨り傳奇を最も眞率と爲す。作者心中の蘊結に就きて、發して詞華と爲し、初めより藏山傳人の思無く、亦科第利祿の見なし。心に稱いて出で、遂に千古の至文と爲る。

氏は、この中の「科第利祿の見なし」の箇所について、「吳梅は明らかにここで、元雜劇が科擧の準備の爲に書かれたという古い言い傳えを念頭に置いている。」という注を施され、吳梅の意圖が、元雜劇よりも明の傳奇の方が、より「眞率」であることを主張する點にあったと理解されたようであるが、これは氏のあやまりである。

傳奇という言葉は、一般には、唐代の短篇小説及び明清の長篇戯曲を指すのが普通であるが、その本義は、要するに珍しい話ということであつて、宋元の戯曲をもこの名に

よつて呼ぶ場合は往々にしてある。(例えば、「中原音韻」では、雜劇を傳奇と稱している。)吳梅はここで、傳奇という言葉を用ゐ、およそ戯曲一般という意味で使用しているのであり、「曲海總目提要」という、その内容に元雜劇についての言及を多く含む書物の性質から考えても、この序文が、氏の理解されるように、元雜劇に對する明代傳奇の優位を説いたものでないことは明らかである。そのことはまた、吳梅自身が別の個所で、

余嘗て謂えらく、天下の文字は惟曲を最も眞と爲す。利祿の見る胸臆に存する無きを以てなり。(吳梅「中國戲曲概論」一、金元總論。傍點評者)

と、同じ主張を、傳奇を曲と言い直して述べていることから察せられる。要するに、この吳梅の見解は、王國維が、元曲の佳處はいづくに在りや。一言以てこれを蔽わば、曰く自然のみ。——中略——その劇を作るや、これを名山に藏し、これを其の人に傳えんとするの意有るに非ざるなり。(「宋元戲曲史」、十二、元劇之文章)

と云うのと同じ趣旨であり、決して、氏が考えられるよう

な「大膽なテーゼ」ではない。

更に、評者の考えを以ってすれば、一般に、個々の文學作品ではなく、一つの文學ジャンルについて、それがどれ程作者の心情をよく表しているかを考えること自體、あまり意味があるとは思えない。問題は、あるジャンルが他のジャンルに比べて、どれだけ眞率で、どれだけ人々の心を反映しているかではなく、むしろ、各々の文學ジャンルが、各々の時代のどのような人々の心情を代辯しているのかということではないだろうか。そのような觀點から見ると、明の傳奇は明らかに士大夫の文學である。そして、この論文では、この「士大夫の文學としての傳奇」という視點が、完全に缺落している。しかし、明代傳奇というジャンルを、小説や元雜劇等の他のジャンルとの比較に於いて、或いは、その社會的時代背景に於いて捉えようとするならば、この點は看過されるべきでなかった。

明代のように俗文學が大きな發展を遂げた時代にあつては、例えば、戯曲と小説を同列に置いて考えることさえ、ある意味で妥當とは言えない。少なくとも、明代の士大夫

にとつて、戯曲は、小説と比べて、一段と高級な文學であると思はれてゐたはずだからである。小説と傳奇の類似性という先の問題についても、このような兩者の相對的位置が一應配慮されるべきであつたと思う。

以上、明代傳奇の全體的把握をめぐる Brink 氏の考え方に對して、評者の意見をあらまし述べてみた。氏の論文には、その他にも、個々の作品に對する具體的な分析が含まれ、中には、「還魂記」に於ける情と理の對立についての鋭い見解等、興味深い點が多々有つたが、それらについて觸れる餘裕はもはやない。ただ、全體として、明代の傳奇を、具體的な作品に即しながら、もう一度見直そうとする氏の意圖には共感を覺えたことを最後に記しておく。實際、傳奇だけではなく、その背景となる明という時代に對する興味は、もう少し正當な地位を獲得してもよいのではないかと思われた。

(京都大學 金 文京)